



当時の八幡橋付近は、たくさんの船が行き交いました。現在の八幡橋付近
現在の八幡橋付近
左の絵葉書と同じ方向から見る現在の景色



沿道も人の行き来で賑わいました(奥に見える八幡橋)
現在の原町付近
左の絵葉書と同じ方向から見る現在の景色



原町から、八幡橋を望む景色
現在の根岸橋付近
左の絵葉書と同じ方向から見る現在の景色



絵葉書が伝えてくれる、当時のにぎわいと桜が美しい風景
現在の根岸橋付近
左の絵葉書と同じ方向から見る現在の景色



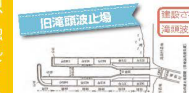
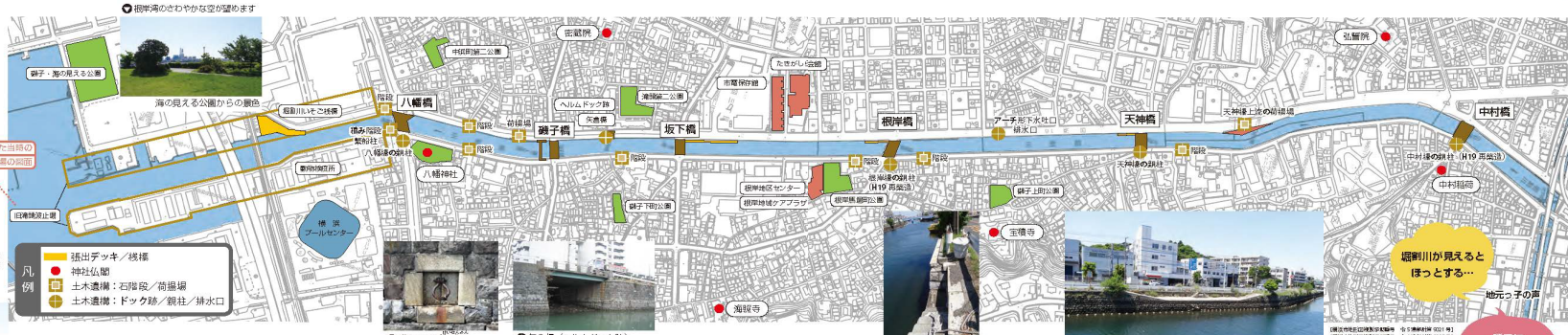
馬場町から、根岸橋を望む景色
初期の根岸の堀割と開閉後の中村の切通し(右奥)



高がりがなんとも魅力...
このくだけた雰囲気の
高がりがなんとも魅力...



堀割川 魅力マップ



「磯子史話」より
1872年(明治5年)に竣工した滴頭波止場の一部は、現在の動物検疫所敷地となり、旧波止場の面影を残しています。



旧滴頭波止場跡地(現在の動物検疫所敷地)



旧滴頭波止場跡地の石積み

今も残る近代土木遺産

1923年(大正12年)9月1日の関東大震災で堀割川をはじめ横浜の運河は壊滅的な被害をうけました。復興計画では、貿易港や工業都市としての発展という観点から、水陸を結ぶ運河の復興を重視しました。大岡川は当時の最新技術である鉄筋コンクリートの直立護岸で復旧されましたが、帷子川や中村川、堀割川は石積みの護岸で復旧されました。石積みの護岸と言ってもそれぞれの空石積ではなく、分厚いコンクリート製の重力式擁壁です。基礎にはたくさんの松杭が打ち込まれています。橋も木橋から鉄の橋に架け替えられ、橋ごとにデザインの異なる親柱がつけられました。船から荷物を積みおろすための荷揚場や階段が造られ、船をつなぐ繫船環も規則的に配置されています。ほとんどの荷揚場は埋められてしまいましたが、天神橋上流や磯子橋下流には今も荷揚場が残っています。八幡橋下流の階段は今も健在です。現在の堀割川は、震災復興工事による当時の姿をほぼそのままの形で今に伝えています。全川にわたって当時の姿を伝えている運河はこの堀割川だけです。

復興時に造られた堀割川にかかる橋の「親柱」のデザイン図面も残っています。



親柱のデザインは、当時の優れた技術が感じられます。技術が感じられます。

風情いっぱい 石積みの護岸

～町並みを買ってつづく石積みの護岸は根岸の風情です～



川に降りる階段
「繫船環」と「排水口」
排水口(アーチ型下水吐口)
川に降りる階段
荷揚場
風情のある石積護岸



上流でこの中村川と分派(左が堀割川)

海運で栄えた横浜の象徴のひとつ「運河のネオ・ブリュー」
「運河のネオ・ブリュー」は、その名の通り中村川と分派点です。また、堀割川は大岡川水系に属しています。



分派点
中村川
堀割川

Yokohama Bay
Horikiri Gawa River